様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 1 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００９～２０１１
課題番号：２１５９２７４２

研究課題名（和文）乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者に対する看護援助モデルの開発

研究課題名（英文）Development of the nursing support model for a breast cancer patients receiving radiation therapy after the breast conservative surgery

研究代表者
二渡　玉江（FUTAWATARI　TAMAE）
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：００１４３２０６

研究成果の概要（和文）：
乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者のケアの実状は、治療開始前には必要なケアは行われているものの、治療中・治療後ではケアの実施割合が低かった。以上は治療中・後のケアの充実が図れるよう継続的ケアシステムや連携を強化する重要性を示唆する。患者が抱える問題として、治療前は治療への意思決定や治療の影響に対する不安が、治療中は局所症状に対する不安、治療費にかかる経済的負担、治療の生活や仕事への支障が、治療後は、局所症状の残存や今後の事に対する不安が挙がった。これらは治療時期に応じた支援および継続した支援の必要性を示す。結果をもとに作成したアセスメントツールの臨床実用性、適切性・妥当性について検証を行う。

研究成果の概要（英文）：
Under treatment and after treatment, the actual circumstances of care for the breast cancer patient who receives radiotherapy after the breast conservation surgery was the low implementation rate, although it is performing necessary care before a medical treatment start. Above suggests the importance of strengthening about a cooperation and continuous care system to maximize enhancement of care under and after treatment. The following items were raised as a problem faced by patients. ; In the pre-treatment, there are anxiety for the influence of treatment and decision-making. ; Under treatment, there are anxieties for remaining local symptoms, the burden of treatment cost and interfering with their life and work. ; After treatment, there are anxieties for remaining local symptoms and about the future. These indicate the need for continued support and assistance according to the timing of treatment. In the future, it verifies about the clinical practicality of the assessment tool created based on the result and appropriateness validity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,500,000	450,000	1,950,000
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：臨床看護学、がん看護学
科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学
キーワード：乳がん、乳房温存療法、看護援助、モデル

１．研究開始当初の背景

乳がんの手術療法は、患者の QOL の向上、乳がんが全身病であるとの見解から乳房切除術から乳房温存療法へとシフトした。乳房温存療法とは、原発巣である乳房腫瘤を切除し、顕微鏡学的がん遺残が疑われる残存乳房に放射線治療を行う治療法で、最も頻度の高い治療法である。

乳房温存療法中の患者が抱える問題状況は､身体的苦痛、心理的苦痛、社会活動の制限などが挙げられる。佐藤は乳房温存療法を受けた乳がん患者の心理状態の経時的変化を調査し、術後１ヶ月で良好な状態に至り、術後３ヶ月で再び増悪するとし、これには放射線治療後の副作用の増強が影響していることを指摘している。

このような問題状況にあるにもかかわらず、乳がん患者に対する実施されていない支援の一つとして、阿部が放射線療法に関する看護援助を挙げているように、放射線治療に伴う看護援助は確立されていない状況にある。William は放射線治療を受ける患者に対する看護師の役割は、患者が副作用に対する適切に対処し､マネジメントがうまくいくように準備することであると示唆している。

２．研究の目的

本研究では以下の３点を目的とする。

① 乳房温存術施行後、放射線治療を受ける外来通院中の乳がん患者に対するケアの現状と課題を明らかにする。

② 乳房温存術後、外来で放射線療法施行中の乳がん患者が体験する身体的、心理的、社会的な苦痛、日常生活への影響を質的・量的調査から明らかにする。

③ 上記の結果から、アセスメントツールを作成し臨床適用する。

３．研究の方法

前述した目的①～③にそってそれぞれの研究方法、結果、得られた知見を述べる。

４．研究成果

研究①－１：乳房温存術を受けた乳がん患者に関する看護研究の動向と課題

【対象論文・分析方法】

1999 年から 2008 年までに日本国内で掲載された乳房温存術を受けた乳がん患者に関する論文から、研究の動向と課題を明らかにした。「医学中央雑誌」を使用し，「乳がん」「看護」「乳房温存術」「乳房温存療法」をキーワードに検索を行い、研究デザイン、方法、内容などについて分析した。

【結　果】

対象文献は 49 論文であり、量的研究が 53.1％と半数以上を占め、研究デザインは、因子探索的研究が最も多く 57.1%であった。研究内容は「心理的変化とストレスコーピング」(18 コード：36.7％)、「治療に伴う機能障害の予防と生活への影響」（７コード：14.3％)、「治療選択や QOL に影響する要因」（８コード：16.3％)，「治療に関連した情報提供と支援ニーズ」（５コード：10.2％)、「看護介入プログラムの開発とケア実践の評価」（11 コード：22.4％）の５つのカテゴリに集約された。

【結　論】

以上の結果は、乳房温存術や継続治療がもたらす心身両面への影響を QOL の視点から捉え、心理的な看護介入プログラムによる介入

研究がなされるようになってきていることを示す。

研究①－２：乳房温存術後放射線治療を受ける乳がん患者に対する専門職（乳がん看護認定看護師）のケア内容の把握

【目　的】

乳房温存術後の放射線治療を受ける患者に対する乳がん看護認定看護師の看護の実状と課題を明らかにする。

【対象と方法】

日本看護協会ホームページの認定看護師名簿を参照し、無記名式質問紙調査を郵送法で実施した。放射線治療前・中・後のケア内容などは選択式回答、課題は自由記述とした。

【結　果】

対象者 97 名中、有効回答は 40 名（41.2%）であった。放射線治療前はケア内容の約半数で実施割合が 70%を超えていた。治療中では約 90%の項目で 30～50%、治療後では全ての項目で 40～60%の実施割合であった。課題としては、【質の高い放射線看護の実践】【継続的ケアシステムの確立】【連携の充実】の３カテゴリが抽出された。

【結　論】

乳房温存術後の放射線治療看護では、放射線治療中・後において専門職を活用した質の高い放射線看護の実践、継続的ケアシステムの確立、連携充実の強化に取り組む必要がある。

研究②

患者のニーズに即したアセスメントツールを作成するために、乳房温存術後放射線治療を受けている乳がん患者の問題状況を質的・量的調査をもとに明確化した。

研究②－１：乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の問題状況に関する質的研究

【対象および方法】

乳がん患者10名を対象として、放射線治療開始時から治療後までをレトロスペクティブな縦断調査を行った。分析は、ベレルソンの内容分析の手法を参考に質的帰納的に分析した。

【結　果】

放射線治療前の苦痛は、「放射線治療移行への覚悟を決める」「治療が及ぼす影響に不安がある」「相談する快適な環境がない」など４カテゴリであった。治療中では、「治療に伴う局所症状の出現による不安」「順調な経過であるという実感がない」など４カテゴリであった。治療後では「治療による局所症状の残存による不安」「今後に対する不安」など３カテゴリが抽出された。

【結　論】

以上は放射線治療のスムーズな移行と治療が継続には有害事象や治療に関する情報提供の必要性を示唆する。

研究②－２：乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の問題状況に関する量的研究

【対象および方法】

乳がん患者22名を対象として、放射線治療開始時から治療後までをプロスペクティブに縦断調査を行った。QOLは、QOL－RTT（Radiation Therapy Instrument）日本語版を用いた。感情状態は、POMS短縮版（金子書房）を用いた。

【結　果】

QOL得点が低かったのは、治療開始前では「治療部位の皮膚の不快」「局所に痛みを感

じる」「医療費や生活費の心配」「治療を受けるのがこわい」などの項目であった。治療開始初期では、「医療費や生活費の心配」「治療による仕事や生活への支障」などの項目であった。治療３～４週では、「医療費や生活費の心配」「治療部位の皮膚の不快」などの項目であった。治療終了１ヶ月では、「治療部位の皮膚の不快」「性生活に対する満足度」などの項目であった。

各時期におけるQOL 得点とPOMS 得点との相関では、全ての時期で緊張とQOL得点間に高い負の相関を認めた。

【結　論】

以上の結果は、QOL得点と緊張状態とは関連し、放射線治療の移行と治療継続には、治療開始前から、有害事象や適切な対処方法に関する教育、治療に関する情報提供の必要性を示唆する。

研究③：アセスメントツールの作成と臨床への適用

これらの結果をもとにアセスメントツールを作成し、乳腺看護外来において臨床適用を開始した。今後は臨床実用性、適切性妥当性について検証を行う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

１．小林万里子、市川加代、樋口友紀、廣瀬規代美、中西陽子、堀越政孝、二渡玉江：乳房温存術後に放射線治療を受ける乳がん患者の看護に関する調査　－乳がん看護認定看護師の看護ケアの実状と課題－ The Kitakanto Medical Journal, VOL61 349-359,2011. 査読有

２．二渡玉江,砂賀道子,堀越政孝,武居明美,高橋陽子,廣瀬規代美,中西陽子,神田清子：乳房温存術を受けた乳がん患者に関する看護研究の動向と課題, The Kitakanto Medical Journal,VOL.60.17-23.2010. 査読有

〔学会発表〕（計１件）

１．Tamae Futawatari, Michiko Sunaga, Masataka Horikoshi, Akemi Takei, Yoko Takahashi, Kiyomi Hirose, Yoko Nakanishi, Kiyoko Kanda：Trends and Tasks in Research on Cancer PatientsReceiving Breast Conserving Surgery, 16th International Conference on Cancer Nursing, MARCH 10,2010, Atlanta in USA

６．研究組織

(1)研究代表者

二渡　玉江（FUTAWATARI　TAMAE）
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：００１４３２０６

(2)研究分担者

・神田　清子（KANDA　KIYOKO）
群馬大学・大学院保健学研究科・教授
研究者番号：４０１３４２９１

・堀越　政孝（HORIKOSHI　MASATAKA）
群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：８０４５１７２２

・武居　明美（TAKEI　AKEMI）
群馬大学・大学院保健学研究科・助教
研究者番号：７０４３１７１５

・中西　陽子（NAKANISHI　YOKO）
群馬県立県民健康科学大学・教授
研究者番号：５０２５８８８６

・廣瀬規代美（HIROSE　KIYOMI）
群馬県立県民健康科学大学・准教授
研究者番号：８０２５８８８９
・樋口友紀（HIGUCHI　YUKI）
群馬県立県民健康科学大学・講師
研究者番号：２０３４１８０２

(3)連携研究者
なし
研究者番号：